

示唆の受容・拒否

—— 伝達者に関する実験* ——

鈴木 康平

A Study on Acceptance-Rejection of a Suggestion

— An experimental study on mediators of a suggestion —

by

Kouhei SUZUKI

問題と目的

示唆の研究の流れの概観は、拙稿別掲論文(12)にゆずるが、Youngが社会的、文化的な背景を基調に(16)、Hovlandらが、*Persuasive Communication*の観点から(i)、KrechやCrutchfieldが、示唆の受け手の側に焦点をあわせて(9)それぞれSuggestionについての理論を出している。また、HovlandとWeiss(8)それに、Aronson、TurnerとCarlsmith(2)らが、Credibilityの点から実験をおこなったところを報告している。

さて、この研究は、「示唆の受容・拒否は、受け手が、その源に対しても信頼感の程度に依存する」との仮説のもとに、これまでおこなってきた一連の研究の流れのひとつであって、ここでは、「示唆と伝達者」に焦点をあわせて、その検討を試みた実験の一部を報告する。

すなわち、当研究においては、これまで、「源」を抽象的な人物として、実験的に設け、それと受け手との間に、伝達者を介在させるデザインをとってきている。そして、これまでの結果では、示唆の受容・拒否が、源の信頼感に依存するという上に述べた仮説は支持される傾向にあることが見出されてきているが、実験の手續上介在させた伝達者の存在の影響の有無を検討しておくことが必要であると考えられる。もちろん、示唆の受容・拒否と信頼度との関連の追及は本研究の一連の過程を通じて続けられるものであるが、加えて、伝達者に関する諸要因についても解明の手がかりがえられるよう考慮をはらうこととする。

方 法

実験的方法をとる。具体的には手続きの項でのべる。

- i) 示唆の源：抽象的なある人「A」
- ii) 伝達者：男子2名、女子2名(いずれも大学院教育心理学専攻生以上)
- iii) 受け手(被験者)：名古屋市内中学校2年生徒(男女)4クラス
- iv) 実験事態：普通教室で、「目測」領域の課題に関する作業事態を設定
- v) 実験用具：
 - a) 「目測」判定用掲図(10課題6枚、テスト課題1題1枚)

* この論文の一部は、日本教育心理学会第8回総会で報告されたものである。

- b) 「目測」判定記入用紙
- c) 信頼度記入用紙
- d) 源・伝達者評定用紙
- e) ものさし，分度器

手 続 き

〔1〕 信頼形成過程

被験者全員教室へ入る。そこで，伝達者が教室へ入り，まず，自分の目測の能力を被験者につたえ，同時に，この実験のインストラクターとして依頼されてやってきたことを伝える。それからつぎの教示をする。

「今から，Aという人のおこなった目測の値をみなさんにしらせます。みなさんのやるべき仕事は，そのAという人の目測の力を判定することです。今から実際に，Aという人のおこなった目測課題と同じものを黒板にはります。そしてものさしや分度器で，実際にそれを測ってみますから，その実測値にもとづいて，Aという人の目測の力が，どの程度であるかを判定してもらいたいのです」

配布された判定記入用紙をまえにおいて，被験者は，一斉に黒板の方を注目するように要求される。

実験者（伝達者）は，Aのおこなった目測の値が記入されている用紙に記されている値を，まず，第1の課題について読みあげる。つぎに，ものさしで，第1課題の「2点間の距離」を実測して，被験者達に，「この距離は75.5cmである」ことをつける。これをもとに，彼らは，「Aという人」の目測値が，「非常によく合っている」から，「まったく合っていない」まで，5段階の判定をくだすわけである。

課題は10課題ある。Table 1 にそれを示す。

Table 1. 10課題と源「A」の目測値の2系列

課 題	系 列	実 測 値	A の 目 測 値 (α)	A の 目 測 値 (β)
1. 2 点 間 の 距 離		75.5cm	76cm	50cm
2. 線 分 の 長 さ (a)		14.7cm	15cm	25cm
3. 線 分 の 長 さ (b)		89.5cm	90cm	70cm
4. 鋭 角 の 大 き さ (a)		22°	25°	35°
5. 鋭 角 の 大 き さ (b)		63°	65°	80°
6. 三 角 形 の 面 積 (a)		275cm ²	260cm ²	90cm ²
7. 三 角 形 の 面 積 (b)		1,110cm ²	1,200cm ²	350cm ²
8. 鈍 角 の 大 き さ		29°	30°	45°
9. 2 線 分 間 の 間 隔		15.8cm	15cm	25cm
10. 正 方 形 の 面 積		2,704cm ²	3,000cm ²	1,000cm ²

すなわち， α 系列は実測値に近く， β 系列は，それから遠いように構成された。そして1つのクラスには1つの系列が与えられた。

〔2〕 信頼度の記入

目測10課題に対する判定が全部終わったところで，被験者は，Aという人の目測能力に，どの位，信頼かおけるか，5段階評定する。

〔3〕 示唆の伝達

信頼度の記入が終ってから、被験者は、自分自身の力（目測に関する）がテストされる場面に直面させられる。教示はつぎの通りである。

「さて、いよいよ、これから、みなさん自身の目測の力をテストしようと思います。今までは、Aという人のことについてばかりでしたが、今度は、みなさん自身のことです。できるだけ、実際に近い値を目測値として出してください。」

被験者達に、目測能力テスト用紙が配られる。そこへつぎの教示と示唆を与える。

「これから、ここに掲げた図形* のこの部分の長さの目測をしてもらいます。さあ、それでは、みなさんの目測をした値をかいていただくわけですが、その前に、さきほどのAという人は、この図形のこの部分を目測で何 cm であるといっているか、みなさんにお伝えしますから、参考までにきいてください。Aという人は、これを、○cm** であるといっています。では、今から、みなさんの目測値を、これを参考にして、そこへかいてください。」

〔4〕 質問事項の提示

上記の手続きにより、作業が終了したところで、実験者は、つぎの質問を発し、回答をもとめる。

① 示唆の受容・拒否。

Aの目測値（テスト時）を参考にした程度（5段階）

② 伝えられた「Aの目測値」（テスト時）は、自然にきこえたか、不自然に感じられたか。

③ その理由。

④ Aという人の年齢。

⑤ Aという人の性別。

男と思っていたか、女と思っていたか、考えていなかったか。

⑥ Aという人の伝達者との近似。

「ぜんぜん似ていない」から、「まったく似ている」までの5段階と、「考えていなかった」のカテゴリーの計6段階。

以上で実験は終了する。

結 果

上述の実験によって得られた資料のうち、ここでは、主として、伝達者に焦点つけたところを整理して示す。

(a) まず、信頼形成過程の結果を示せば、Table 2—1 および 2—2 のとおりである。

これらの Tables から、伝達者が信頼形式過程に及ぼす個人的な要因は、ほとんどみられないといってよいであろうことがわかる。すなわち、 α 系列においては、P、Q いずれの伝達者においても、その Process における被験者達の A に対する判定の値は、大半か(4)ないし(5)の方向への偏りを示し、信頼感も、(4)および(5)(ほとんど信頼できる)に集中し、逆に、 β 系列においては、R、S いずれの伝達者においても、この過程における被験者達の A に対する判定の値が、その大半、(1)ないし(2)の方向への偏りを示し、信頼感も、(1)および(2)(ほとんど信頼できない)に集中しているところからうかがえるわけである)

注： * このテスト課題図形は上形でその垂直線部60cmが目測対象とされた。

** α 系列のクラスには80cm、 β 系列のクラスには55cmと伝えられた。

Table 2-1 信頼形成過程……………α系列(実数と%)

課判	伝達者 P による					伝達者 Q による				
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
1				5	17				6	17
				22.6	77.3				26.1	73.9
2				5	17				3	20
				22.6	77.3				13.0	87.0
3				5	17			2	3	18
				22.6	77.3			8.7	13.0	78.3
4		2	7	12	1		1	9	11	2
		9.1	31.8	54.5	4.6		4.3	39.1	47.8	8.7
5		1	4	13	4			7	10	6
		4.6	18.2	59.1	18.2			30.4	43.5	26.1
6		1	9	9	3	1	1	6	12	3
		4.6	40.9	40.9	13.6	4.3	4.3	26.1	52.2	13.0
7	1	6	6	8	1	2	2	9	8	2
	4.6	27.3	27.3	36.4	4.6	8.7	8.7	39.1	34.8	8.7
8				6	16				3	20
				27.3	72.7				13.0	87.0
9		1	5	12	4			2	11	10
		4.6	22.6	54.5	18.2			8.7	47.8	43.5
10	2	4	10	4	2	2	2	9	9	1
	9.1	18.2	45.5	18.2	9.1	8.7	8.7	39.1	39.1	4.3
信	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	3		17		2	2		21		
	13.6		86.4			8.7		91.3		

Table 2-2 信頼形成過程……………β系列(実数と%)

課判	伝達者 R による					伝達者 S による				
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
1	7	13	4			12	10			
	29.2	54.2	16.7			54.5	45.5			
2	8	13	1	2		8	14			
	33.3	54.2	4.2	8.3		36.4	63.6			
3	2	10	12			4	12	6		
	8.3	41.7	50.0			18.2	54.5	27.3		
4	2	12	8	2		3	17	2		
	8.3	50.0	33.3	8.3		13.6	77.3	9.1		
5	6	11	4	2	1	14	8			
	25.0	45.8	16.7	8.3	4.2	63.6	36.4			
6	22		2			22				
	91.7		8.3			100.0				
7	20	4				22				
	83.3	16.7				100.0				
8	9	9	4	1	1	18	4			
	37.5	37.5	16.7	4.2	4.2	81.8	18.2			
9	8	12	3	1		16	5	1		
	33.3	50.0	12.5	4.2		72.7	22.6	4.6		
10	18	3	1	2		22				
	75.0	12.5	4.2	8.3		100.0				
信	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	8		13			17		5		
	87.5		12.5			100.0				

注. 伝達者 PとR…男 QとS…女
 表頭2行目の数字は判定の段階 (1)…「非常にわるい」 (5)…「非常によい」
 表中、下から3行目かっこ内数字は、信頼度
 (1)…「まったく信頼できない」 (5)…「まったく信頼できる」

Table 2-1. 2-2 については、男子群の結果である

b) つぎに、源の年齢についてはどうであろうか。

Table 3 源の年齢 (実数と%)

系 伝 被 項	α 系 列				β 系 列			
	P		Q		R		S	
	男	女	男	女	男	女	男	女
年齢記入	10 45.5	9 39.1	8 34.8	12 50.0	10 41.7	3 13.6	10 45.5	7 29.2
年齢考えず	12 54.5	14 60.9	15 65.2	12 50.0	14 58.3	19 86.4	12 54.5	17 70.8

これについても、「年齢を考えていなかった」とする回答が多くを占めている。そして、年齢を想定した被験者達が記入したところをみても、必ずしも一定の年齢への集中はみられないが(各群の平均値は、9才から23才にわたっている)、ただ、ここで、若干ではあるにせよ、伝達者の年齢に比較的近い値を回答していた被験者がいたことは、今後の分析の対象・課題とされるであろう。

(c) さらに、源の性別について、被験者達は、どのように反応しているかをみてみよう。

Table 4 がそれである。

Table 4 源の性別 (実数と%)

系 伝 被 項	α 系 列				β 系 列			
	P		Q		R		S	
	男	女	男	女	男	女	男	女
男	9 40.9	13 56.5	5 21.7	11 45.8	9 37.5	6 27.3	9 40.9	7 29.2
女	6 27.3	2 8.7	5 21.7	2 8.3	0 0.0	1 4.6	6 27.3	2 8.3
性別考えず	7 31.8	8 34.8	13 56.5	11 45.8	15 62.5	15 68.2	7 31.8	15 62.5

総じて、「性別を考えず」としたものの数が多いが、注目しておきたいのは、源を男子と考えていたものが、伝達者の性のいかんにかかわらず、女子としたものより多い点である。このことについての解釈はこの資料だけからは、断断は許されない。今後の検討にまつところである。

(d) 最後に、源と伝達者の類似をどの程度彼らは考えて作業を進めていたのであろうか。Table 5 に示されるように、そのほとんどのものが、「類似については考えなかった」か、「あまり似ているとは思わなかった(表側, 項, 1, 2, 3)」との傾向の反応をしている。

Table 5 順と伝達者の類似 (実数と%)

項	系 α		系 列		系 β		系 列	
	P		Q		R		S	
	男	女	男	女	男	女	男	女
1					2		1	2
					8.3		4.6	8.3
2	4		2			1	1	1
	18.2		3.7			4.6	4.6	4.2
3	1	4	3	8	3		8	4
	4.6	17.4	13.0	33.3	12.5		36.4	16.7
4	5	5	4	5		2	2	1
	22.6	21.7	17.4	20.8		9.1	9.1	4.2
5					2	2	1	1
					8.3	9.1	4.6	4.2
類似考えず	12	14	14	11	17	17	9	15
	54.5	60.9	60.9	45.8	70.8	77.3	40.9	62.5

以上で、資料の整理とそれに伴う概観をしたのであるが、この研究のねらいとした「伝達者」の存在は、示唆の受容・拒否に関して、すくなくとも、その信頼形成過程においては、強い影響を及ぼさないようであるが、との面をとりあげてもそうであると一義的というのは、速断にすぎるであろう。さらに検討を深めていく必要のあるところである。

参 考 文 献

- 1) Allport, G. W. The historical background of modern social psychology. In Lindzey (ed.) *Handbook of Social psychology*. Cambridge : Addison-Wesley. 1954
- 2) Aronson, E., Turner, J. A., & Calsmifh, J. M. Communicator Credibility and Communication discrepancy as determinants of opinion Change *J. abnorm. soc. psychol.* 1963, **67**, 31—36
- 3) Berkowitz, L. (ed) *Advances in Experimental Social Psychology* Vol 1 New York & London : Academic Press.
- 4) Feather, N. T. Acceptance and rejection of arguments in relation to attitude strength, critical ability, and intolerance of inconsistency *J. abnorm. soc. psychol.* 1964, **69**, 127—136
- 5) Freedman, J. I. & Steinbruner, J. D. Perceived choice and resistance to persuasion. *J. abnorm. soc. psychol.* 1964, **68**, 678—681
- 6) Festinger, L., & Maccoby, N. On resistance to persuasive communications *J. abnorm. soc. psychol.* 1964, **68**, 359—366
- 7) Hovland, C. I., Janis, I. L., & Kelley, H. H. *Communication and Persuasion*, New Haven: Yale University Press.

- 8) Hovland, C. I., & Weiss, W. The influence of source credibility on communication effectiveness, *Publ. Opin. Quart.* 1951—52, Winter, 635—650
- 9) Krech, D., & Crutchfield, R. S. *Theory and Problems of Social Psychology*. New York : McGraw-Hill 1948
- 10) Newcomb, T. M., Turner, R. H., & Converse, P. E. *Social Psychology* New York. Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- 11) Steiner, I. D., & Fishbein, M. *Current Studies in Social Psychology* New York. Holt, Rinehart and Winston, Inc. 1965
- 12) 鈴木康平 : 示唆の受容・拒否についての実験的研究(1), 心研, 31, 209—221
- 13) 鈴木康平 : 示唆の受容・拒否—源と伝達者について—日本心理学会第28回大会論文集, 446
- 14) 鈴木康平 : 示唆の受容・拒否—その実験的考究—教育・社会心理学研究, 4, 157—168
- 15) 鈴木康平 : 示唆の受容・拒否—とくに伝達者についての検討—日本教育心理学会第7回総会発表論文集, 264
- 16) Young, K. *Social Psychology*. New York. Appleton, 1944

Summary

In this study, credibility of the suggestor's ability in a certain field is assumed to be a large factor in acceptance-rejection of a suggestion.

According to the design of this experiment, the source of a suggestion is hidden from suggestees, so the suggestion must be communicated by a mediator. In such a case, the influence of a mediator upon suggestees has to be checked.

The role of a mediator was taken by a graduate course student and the suggestees were lower secondary schoolboys and girls

The findings showed that the higher the degree of credibility grew, the higher the degree and the strength of acceptance became, and influence of the mediator was not so much large during the process of creating credibility, but the effect of the mediator's existence in such an experiment has to be examined by the following new devised experiment.